

第6回 市民会館名画劇場

開催日：平成18年（2006年）9月25日（月）・26日（火）

10年ぶりに市民会館名画劇場が復活した今回は、都市近郊の農家や老人性認知症など、これまで映画が描いてこなかった問題に果敢に挑戦した1980年代の映画を上映しました。

<上映作品一覧>

『遠雷』1981年

につかつ撮影所＝ニュー・センチュリー・プロデューサーズ＝ATG

135分

監督：根岸吉太郎 原作：立松和平

出演：永島敏行、ジョニー大倉、石田えり

『転校生』1982年／日本テレビ放送網＝ATG／113分

監督：大林信彦 原作：山中恒

出演：尾美としのり、小林聡美、佐藤充

『夢千代日記』1985年／東映／129分

監督：浦山桐郎

出演：吉永小百合、北大路欣也、名取裕子

『花いちもんめ』1985年／東映／125分

監督：伊藤俊也

出演：千秋実、十朱幸代、加藤治子

遠雷

1981年 につかつ撮影所



原作:立松和平
脚本:荒井晴彦
監督:根岸吉太郎

【出演者】
永島敏行
ジョニー大倉
石田えり
横山リエ
ケーシー高峰 ほか

宇都宮でビニールハウスのトマト栽培を職業としている青年とその親友の、明暗分かれる青春を鮮烈に描いた立松和平の同名小説の映画化である。1970年代以降の日本は、この映画でビニールハウスの隣に団地が建つように、各地の都市近郊で風景が変貌し、旧来の「都市と農村」の対立だけでは描けない複雑な社会が形成された。またこの時期の日本映画界は産業としては低迷していたが、その中において日活撮影所は最も多くの映画を量産し、次々と新しい才能を送り出し続けた。この映画の監督根岸吉太郎と脚本家荒井晴彦はともに日活を経由しており、そうした現代的な風景、またその中で育った多様な価値観で揺れる青年像を描くことで、この作品をリアルな生活感覚あふれる新世代の青春映画に結実させた。主人公の青年はトントン拍子に結婚式を挙げ、その親友は不幸な殺人を犯してしまう。長々と続く幸せな披露宴の最中に親友が罪を告白するという印象的なシーンは原作ではなく、脚本における創作であった。「キネマ旬報」ベストテン第2位。

(カラー スタンダード 135分)

夢千代日記

1985年 東映(京都)



企画・脚本:早坂暁
監督:浦山桐郎

【出演者】
吉永小百合
北大路欣也
名取裕子
田中好子
樹木希林 ほか

舞台となるのは山陰の湯村温泉。被爆二世である夢千代は、白血病と戦いながら母が残した芸者置屋「はる屋」の経営を続けていた。そこには、さまざまな事情を抱えた女が、男がやってくる。限られた命のなかでひたむきに生きる夢千代は、ふと知り合った旅役者に心をひかれていく…。夢千代の生みの親でもある脚本家、早坂暁によれば、この夢千代は当初から吉永小百合を想定して作られたキャラクターであり、今日では彼女の当たり役となっている。1981年から84年にかけてNHKで3度にわたって放映された人気テレビ・シリーズの映画による完結篇。吉永小百合と監督の浦山桐郎コンビの復活が話題を呼んだ。世評の高い、浦山のデビュー作「キューボラのある街」(1962)は、主演の吉永を「少女スター」から「女優」に脱皮させた作品としても知られている。浦山は本作完成後に死去し、これが遺作となった。生涯に9本しか作品を残さなかった浦山は、寧ろ監督として映画史に名前を止めることになったが、うち吉永の出演作は4本を数えている。

(カラー ビスタ 129分)

転校生

1982年 日本テレビ放送網



原作:山中恒
脚色:剣持巨
監督:大林宣彦

【出演者】
尾美としのり
小林聡美
佐藤允
樹木希林
穴戸錠 ほか

舞台は尾道の中学校。坂と海と光の街だ。夏のある日、ワンバク少年斉藤一夫のクラスに一人の転校生がやってきた。女の子だ。名前は斉藤一美といい、一夫と一字違いだった。一美は一夫と幼稚園の同級生だったといい近づいてくるが、そんなある日、ふとした弾みで寺の階段から落ちそうになった一美を救おうとして、一夫と一緒に転がり落ちる。気がつくどうしたことが、一夫は一美に、一美は一夫になっていた。二人は入れ違ってしまったのだった。監督の大林宣彦は8ミリや16ミリの個人映画作家として、またテレビのCMの敏腕ディレクターとして知られていたが、1977年の「HOUSEハウス」で初めて長篇映画を手がけた。思春期の、少女のなかの少年、少年のなかの少女が重なりあう一瞬のゆらぎを、ファンタジー形式のなかで見事に映像化した作品である。この後に製作される「時をかける少女」(1983)、「さびしんぼう」(1985)とともに「尾道三部作」と呼ばれている。「キネマ旬報」ベストテン第3位。

(カラー ビスタ 113分)

花いちもんめ

1985年 東映(京都)



脚本:松田寛夫
監督:伊藤俊也

【出演者】
千秋実
十朱幸代
加藤治子
西郷輝彦
長谷川真弓 ほか

今日大きな社会的関心を集めている、老人性の認知症(痴呆症)の問題に正面から取り組んだ伊藤俊也監督の力作。アルツハイマーとなっていく一人の考古学者と、その家族たちの苦闘する姿が、とくに舅と嫁の関係を軸に力強い演出でリアルに描きだされている。病人の介護をめぐる、いわゆる「家族愛=親子愛」の根源を問いただしていく、この映画の主題はますます重いものになっている。「女囚さそり」シリーズ(1972~73)や「誘拐報道」(1982)など、常に社会的な広がりを見越して入れたドラマ作りを特徴とする、伊藤監督らしい重厚なホーム・ドラマである。主人公の老学者を演じた千秋実、自身自身が脳卒中から回復した体験をもっており、その存在感は圧倒的であった。この年多くの演技賞を受賞している。

(カラー ビスタ 125分)

9月25日(月)・26日(火) 下関市民会館大ホール

■上映スケジュール

25日 13:30「転校生」	26日 10:00「花いちもんめ」
15:35「夢千代日記」	12:15「夢千代日記」
18:00「遠雷」	14:35「転校生」
	16:40「遠雷」

■入場料 1日券 500円(全席自由、税込、前売・当日同額、6歳以上有料)

■プレイガイド(7月22日出発開始)

下関市民会館、シーモール「ラン」、快音堂楽器店、下関十字堂楽器店、はまゆう(ジャスコ安岡店内)、カフェ・ド・シンブロン(安岡)、でせえる三好(長府)、池辺ドライクリーニング店(彦島支所前)、菊川ふれあい会館(アブニール)、サンパーク小野田、宇部井筒屋、小倉井筒屋、北九州芸術劇場インフォメーション

■託児サービス

未就学のお子様は、入場をご遠慮いただいております。お子様を無料でお預かりするサービスを行います。安心して上映会をお楽しみください。
[ご希望の方は、9月19日(火)までに下関市民会館へお申し込みください。]

■主催 文化庁、東京国立近代美術館フィルムセンター、財団法人下関市文化振興財団

■後援 下関市、下関市教育委員会、下関市文化協会、朝日新聞社、毎日新聞下関支局、読売新聞西部本社、山口新聞社、(株)下関支局、KRY山口放送、JYS TELEVISION、山陽放送、コミュニティエフエム下関

※国民文化祭・やまぐち2006
会期:平成18年(2006年)11月3日(金・祝)~12日(日)



お問い合わせ・お申し込み先

下関市民会館 TEL.0832-31-6401

FAX.0832-35-0800 <http://www.scpf.jp> e-mail info@scpf.jp